

言霊。

この世界では、その存在と効果が常識的に認められ、かつ、社会を構成する要素の一つとして当たり前のように考えられている。言葉が外界 自然や人間、自分すら含めた全て に与える影響^{II} 言霊の効果は、火や水、風と同じように、一種の力として在る。よって、この《言葉》という一番身近で強大な《暴力》を正しく扱えるよう、言葉の授業というものが教育課程には必ず存在しているし、言霊を専門とする学校も芸術や音楽のそれと並んで運営されている。また言葉という、言葉を銃弾に込めるという方法が広く取り入れられ、言葉の容易な操り方として認知されている。

これからお話しするのは、そんな不思議な世界を背景にした馬鹿話、^{II} かつて、言弾シリーズ』と呼ばれた一連の阿呆ストーリーの外伝である。

と、いうわけで、

GUN x GUN BANG x BANG 言葉遊び系ハイテンションガンアクション！

弾切れまで打ち抜いてみせる！ さあ、銃を取れ！

言弾シリーズ・スピントフ

爆ぜろ！

走狗流歌

これはテンションが急上昇・急発進する物語です。心臓の弱い方はご注意ください。

大陸中心都市、ランゲアゲ。その隣国ニアラに存在する《チーム》と呼ばれる施設の一室から、この物語は始まります。

「私達チームの仕事は知っているね。強力な言霊を使う際に生じる余波、とても言うべき力が、使用者に副作用を起こし、それによって色んなものが破綻してしまいたいけな少女少女達をカウンセリング等の精神治療で社会復帰させるっていう、割と良い事なんだよ。」

そう、ホワイトボードをバツクに語るのは正装の男性（年齢不詳）、ゼベット・パベツト。そして、向かいに並べられたパイプ椅子に不機嫌そうに腰掛ける少年が三人。

学ラン少年^{II} 悼^{II} 焔火、ブレザー少年^{II} 弔^{II} 祇葬屋、一際不機嫌な少年^{II} 頼野琴樹です。

ちなみに、このうち前者一人は『言弾シリーズ』の主人公だったりします。このシリーズは大体こいつらの馬鹿な応酬ばかりの中身も頭もスカスカな話だったので、正直未読でも問題なく本作を楽しめるはずですが、分からなくても責任は取りかねるのでよろしくね！ まあ、細かいことは多分ノリとか勢いとかでどうにかなっちゃよう！ ということにおきましょう。そうしておいてください。

参考までにあらすじを説明すると、

ケンカした 校舎壊した 怒られた 遠くに飛ばされた（中略） 帰ってきた
チームに連れて行かれた オウタ（今ココ）

という具合です。（中略）の部分でもまあ色々 としか表現できないよう なことがあったんですが、それは追々語るとして、まずはゼベットさんの話を聞きましょう。

はい、みなさんお口にチャック！

「まあ、でもそれはチームの所謂《表》の仕事ね。《裏》の仕事は、その集まった問題児の中から、将来有望そうな子を引き抜いて養成し、いざという時に治安維持軍と一緒に戦えるようにすることなんだよね。」

治安維持軍というのは、この世界の魔物的存在、悪言、悪口や陰口などの負の言葉が寄り集まってできたエネルギー体の駆除及び市民の平和の維持を目的とする大陸全体で所有する軍隊のことです。蛇足ですが葬屋さんと颯火くんのお父さんもここで働いて居りますが、それはまた別のお話

「悪言には色んなタイプが居るから、マニュアル通りの言弾しか使えない治安維持軍の人達では対処できないこともある。だから、チームで変化球を作っておこうってこと。だから、『裏』チームではそこに所属する子達を傭兵として貸し出したりしてるんだ。つまり、働けばお金が入るってことね。ちょっと早めに就職先決まったってことなんだから、もうちょっと元気だそうよ皆……」

と、肩を落とすゼベットさん。ソレもそのはず、新しくチーム入りした三人は、いかにも『死刑宣告受けたのでもう生きることを諦めました(ズーン)』みたいな雰囲気を感じて明後日の方向を向いているのでした。お口にチャックどころか、心のチャックが完全ロックです。

「就職っておい……俺達の希望に満ち溢れたキャンパスライフはどうなるんだよ……」
「成績に涙したあの夏とか、進路決まらなくて嘆いた秋冬とか、どうなるんだよ！」
と、言弾専門学校生だった葬屋と颯火が嘆く。とはいえ、彼らは喧嘩の流れ弾という馬鹿な理由で校舎を一つぶつ壊しているので、無事進学できたかは危ういところなんですけど。そもそも、一人一人の成績もそこまで良くないですしね。

ところで、この二人は小学校以来の付き合いで、つまりは幼馴染なんですけど、互いに罵詈雑言を飛ばしあい、TPOお構いなしに言弾使ってケンカをやりだす割りに、二人で力を合わせると割りと強いというかそれで一人前、という色々面倒な関係だったりします。思春期は面倒ですねー、正直仲がいいようにしか見えません。

そんな二人はすっかり絶望の果て、学校は退学で、入れられたのがこんな得体の知れない施設なんですから、まあ将来の夢とか希望とか完全にさようならですね。

まあ、自業自得なんですけど。

「くそ！ 俺の青春を返してくれ！」

「嫌だ！ 働きたくないでござる！」

「それもこれもお前の所為だ、颯火！」

「ハア！？ お前の所為だろ、葬屋！」

「消えろ！」

「失せろ！」

「いい加減にしろ、制服コスプレ野郎共ッ……」

ガタン！と椅子を倒して立ち上がったのは琴樹くん。

「ギアアギア五月蠅いんだよお前らッ！ もうそのやりとり飽きたんだよ！ マン

ネリなんだよ！ むしろ僕はナイーブだよ！ お前らはいいいよな！ 二人で一緒に仲

良しよしてさ！？ 僕なんか、お前らみたいに校舎壊したり、どっかの誰かみた

いに村を壊したりしてないのにチーム送りだよ！？ リンと離れ離れなんだ！ お前

らにッ！ この辛さがッ！ 分かるかアアッ！」

「うわああああ！ 琴樹落ち付けええッ！」

「は、離せば分かる！ とりあえずその高く振り上げたパイプ椅子を置くんだけ！」

「うっ、うっ……！」

椅子を手放して、涙を浮かべながら蹲る琴樹。この少年、半ば葬屋と颯火の『ついで』に送られたという残念極まりない立場で、かつ故郷のキンディネスに居る幼馴染の凜という少女に尋常じゃない愛情を注いでいるので、このチーム送りは地獄送りにも等しい仕打ちなのでした。

とはいえ彼も、ごらんのとおりの悪口雑言で、悪言を大量発生させたという問題児ステータスは持っているんですが。

結局皆自業自得ですね。

同情の余地0ですな。

ちなみに、凜@鈍感には、『私達ずっと友達よ！』と、一回フられています。

「まあ、新しい生活の始まりってことで。今までのあれこれは全部水に流して仲良くしようよ！ ね？」

「ほら、ゼベットさんも言ってるんだから、仲良くしようぜ琴樹！」

「無理です」

「無茶か」

ですよね。

「ところで、チームにはね、三つの科があるんだよね。僕が主任で、悪言の生態と有効利用を研究する《研究科》と、問題児をチームに連れてくる《連行科》と悪言を退治する《駆除科》。葬屋君と颯火君には駆除科、琴樹君には研究科に所属してもらおうからそのつもりでよろしくね！」

「嫌だ！」

「ちなみに、琴樹君は悪言を作って逆言で操るって戦いかたするでしょ。それさ、《毒吐》っていうのどつかな！ なかなか格好いいと思うんだけどんそうしようこれかた一緒に頑張ろうね！ 目指せ！ 伝説の悪言マスター！」

「スルーなのかよ！ この脳内コスモで悪言好きのヒー【以下の発言は不適切な表現があったため削除されました】 ッ……」

「うんうん、その調子でどんどん悪言作ろうね！」

にこにこ笑顔で対応するゼベットさん。無類の悪言好きであるゼベットさんは、琴樹の罵詈雑言も、悪言の研究ならと笑顔で受け流せる程度のスルースキルを身につけているようです。大人ですね。ちなみに、割と無害な琴樹をチームに連れてくるように言ったのはゼベットさんだったりします。

ゼベット・バベット、肩書きは裏チーム総監督悪言研究主任。

どうしようもなく職権乱用ですね。大人気ないのも甚だしいです。

と、ゼベットさんへの罵詈雑言をバツグサウンドサウンドとして楽しみつつ、なんか俺たちはまだ幸せなほうなのかもとか思い始めた葬屋と颯火でしたが、大事なことに気がつきました。

「ん、つつか、葬屋。駆除科ってもしかして……」

「開けッ！」「マァッ！」

と、魔法の呪文と共に突然部屋ドアがぱんぱんと楽しいくらい簡単に蹴破られました。呆然として顔が になっている二人をよそに、この闖入者は華麗に着地して

「音斬風刃！」「音斬雷人！」

「ミラクルツインズ 音斬兄弟ただ今参上！」

ギターを構えて決めポーズ。ぎゅいーん。

「呼ばれてとびでて！」「ジャジャジャジャーン！」

「呼んでネええええええええええ！」

「呼ばれずとびでた！」「ばんぶりりーん！」

「チームにお帰りください」

「何寝ぼけてんだよ葬屋！」「こはチームだろ！」

「君は実に馬っ鹿だなあ……」

「お前たちには言われたくないッ！」

と、この無駄にハイテンションな双子、音斬兄弟は主人公二人が関わりたくない人物ベスト3に入るチーム屈指のお馬鹿さんです。ギターの演奏と歌を遣って言弾を操る自称・歌武器者。この双子を一言で表すと

つぎい。

「聞いたよ二人とも!」「駆除科なんだってね!」

「一緒じゃーん!」

「アーツ! やっぱりか! そんな気はしてたんだよ!」

「お前らと科まで一緒とか嫌だあああ!」

「ええー何でだよー!」「俺達超喜んでたんだよ?」

「もつこれって運命だよ!」「もはやこれは天命だよ!」

「神様の思し召しだよ!」「きつと天啓なんだよ!」

「だからバンド組もつぜー!」

「嫌だ!」

「断る!」

わいわい懐いてくる双子。ちなみに、音斬兄弟と葬屋廻火は学校への道中、一回なんとなくノリで戦ったことがあったんですが、その時双子が葬屋達の歌に惚れこんで、バンドをやるつぜーとしく誘ってきたりするわけですが、まあノリで察して下さい。

「あれ、集合ってまだあとじゃありませんでしたっけ?」

『やつほー、毒舌少年! ひっさしぶりー!』

と、扉が無くなりただなんとも入り口としか言いよつ無いところから、顔を出したのはいおさげと眼帯が特徴的な少年^{なびいせつ}「互井蒼慈くん」、その兄^{あらい}「霜一さん」。

お兄さん、とは言えど、この霜くんは既に死亡済みです。その魂を嘆き等々負の感情の言霊でこの世に繋ぎとめ、弟・蒼慈が憑依させているのです。曰く、異魂遣い。

「時間とか関係ないよ!」「大丈夫、話が終わったのを確認して突撃したから!」

「俺たちとしては超空圧読めてるー!」

『逆に読めてないって言うようなもんだよな、それ』

「あ、とっつか琴樹さん! 研究科なんですってね! これからよろしくおねがいし!」

「お断りします」

「歩み寄りまじょうよ琴樹さあああああん!」

「嫌だ。そもそも、誰にフルボツ」をされて「」につれて「」られたと思ってるんだよ!」

「俺でーす」

「黙れドS野郎がツ! ああああくそム力つく本当早く成仏してくれないかなツ!」

『お前がそつ罵詈雑言を続ける限り無理だな』

「ドSの癖に罵倒されて力つくとか本当お前死ねばいいのに」

『ちょっと、何言ってるんだよ。俺はもつとつくに死んでるぜエー?』

「…う、くそつ! 知ってるわツ!」

「兄さん! あんまり琴樹さんをからかわないでくださいよあ!」

完全にもてあそばれている琴樹を見てからから笑うドS兄を見かね、慌てて蒼慈が

割ってはいる。

「蒼慈…」

「これから仲間としてやっていくんですよ!? 仲良くしようよ、兄さん!」

『えー、親しみを込めて対応してるつもりだけ? 俺流に』

「それがいけないんだよ、もつ! こんなだけど、改めてよろしくね…?」

「蒼慈、お前……、思ったより良い奴だったんだな……」

「えつ、へへ、そつ、ですかね…?」

「というわけで、兄の変わりに一発殴らせてくれ」

「え!?! ちょっと待って琴樹さんそれ違うなんか違う歩み寄り方違うわあッ!」

「バキィ。」

……………

研究科の三人は仲良くやっていけそつでなによりですね!

とそんな研究科三人をzeptさんが笑顔で見守っていたり、駆除科の四人は「バンド!」「細まねえ!」「ドラム!」「できねえ!」「ボーカル!」「やらねえ!」

と騒いでいたり、まさしく混沌というべき状況になってきたこの会議室へ、

「おや、もう盛り上がりつつあるようだな！　だが、主役は後から現れるものなんだよ！　ふっふっふ、みな待ちわびただろう？　皇月様が来てやったぞって聞けえ！」

「……………」

切りそろえた前髪を揺らして一人わめく和装の少女「柏皇月と、無言を貫く同じく和装の少年「澄田 鷲」である。葬屋はじめ新人の三人をチーム送りにした連行科の面々である。

「あ、皇月ちゃん！　他の子も連れてきた？」

「当たり前だとも、ゼベット。私は柏皇月だぞ！」

『私はたしか、つそつぎだぞ』

「違つわ！　かしわさつぎだ！」

「あつはつは、そうかー」

そう笑つのはもちろん鷲なんかではなく、別の和装の少年。おや、新キャラですか？

「はい、みんな！　殴り合いもギターもやめてね！　新しく入った三人はまだ知らない人が居るから紹介するね！」

パンパンと、手をたたいて注意を集めるゼベットさん。さながら幼稚園の先生のようです。扱っている馬鹿ドモの精神年齢的にはまさしくなんでしょうが。

「こちら、連行科の黄泉河鋭利くん」

「どつも、よろしくー」

背に大きな雑刀を背負つた少年「鋭利はそう笑って会釈をした。

「お、案外普通の奴なのな。チームって奇人変人の集まりじゃないのか？」

「おい、颯火、俺らがもつすでにその一員だっというの忘れんなよ」

まったくである。

「ところで、名前を教えて欲しいな。なんていうの？」

「ん、俺は悼颯火、で、こっちのブレザーが弔祇葬屋」

「へえー、颯火塗装屋っていつの？」

「ん？　トソウ？」

『颯火と葬屋』、な

ため息をつきながら見かねてそう補足する皇月。

「こいつは空耳が激しいからな。まあ、それが役に立っているんだが」

「どういふことなんだ？」

「おれはな、ぎなた違いなんだよ。弁慶ぎなた読みって知ってるか？　文節を変に区

切つて、文の意味を通じなくしてしまう読み方なんだけど。そういう風に言霊の効果
を打ち消す『射消師』っていうことになってるよ」

ぎなた読み。というのは『弁慶が雑刀で刺し殺して…』という文を『弁慶がな、ぎ

なたでさ、しころして…』という用に区切り、意味が通じなくなったことから来た読み方で、どうやら、その意味が通じなくなる』という特性を使つみたいですね。その

意味では、『黙秘剣』を使つて言霊を使えなくする鷲と似ている点があります。

「空耳はもとから癖っていうか、難聴でね。でも、これはこれで『本来の意味が通じ

ない』から打ち消す効果になるよって、ここにつれてこられた時にゼベット言われてさ。それから直してないんだけどね。まあよろしくー」

「やっぱり変な奴だつたんだな、颯火」

「そもそも一般人はこんなところにごないぜ、葬屋」

「大丈夫、おれあんま面白いこととかできないし、迷惑あんまかけないと思うからー」

「別に面白いことをもともとここに来たわけじゃないんだけどな、俺ら」

『別にトソウ(トソウ)でもめて(トソウ)似たわけじゃないんだけど』？

「何が似てるってッ！？」

『なにがし、照らしてッ？』

「……………もういや」

「え？ なんかつた？」

この二十四時間空耳アワーの鋭利とまともな会話をする事は筆談でもない限り無理なようです。ポケモツツコミもあつたもんじゃありません。二人が頭を抱える今も、当の鋭利は「え？ え？」と小首をかしげるばかりです。

「やれやれ、と無言のまま唯一の常識人こと驚は方を落とした。

「ゼベつとさん！」

続いて、甲高い声と共に、現れたのはフリフリヒラヒラのロリータ服に身を包んだ少女と、その子に手を引かれた和装の少女です。

「うさぎちゃん！ 待ってたよっ！」

と、バタバタと駆けてきたフリフリ少女を満面の笑みで抱きあげるゼベつとさん。

「この子は研究科の憂戯^{うきげ}由^ゆちゃん！ 人形に悪言を封印して操る《遊独》を使っただけど、かわいいでしょー！ 本当もつ可愛いよねーっ！」

「あいつ、悪言好きの上にロリコンだったのか…」

『いや、シヨタもいけるだろ、あの人。なあ、蒼慈』

「ええ、そうですね…。僕もいつもは割りとあんなかんじにされてますし…」

琴樹と霜一達は采れるばかり。異様にこのロリータ少女「遊を可愛がるゼベつと」に、みんな白眼とかいう第三の眼が開いちゃってますね。

「まあでも、遊ちゃんは捨てられてたところをゼベつとさんが拾って育てたって言っていました、娘みたいに可愛がってる部分も…」

「いや、ロリコンだな」

「ちよつと、みんな勘違いしてるみたいだけど、僕は遊ちゃんの容姿的要素が好きなわけじゃなくて、その悪言の遣い方の素晴らしさが好きなんだからね！」

『服はお前の趣味だろうが』

「可愛い女の子に可愛いものを着せることの何が悪いんだい？」

真顔で返答するゼベつとさん。ちなみに、ゼベつとさんは悪言研究のために、人型の悪言を何人か作り上げ使役してますが、それらは全て幼い少年少女だったりします。

『その方が暴走しても止めやすいから』というところが、どうみても犯罪です。

「葬屋、俺この秩序のちの字も無いここで生活していく自信がなくなってきたよ」

「キャラ説明だけで6Pも行くような濃い面子と付き合ってたなら寿命が縮まるって」

「帰りたい」

「死にたい」

八一、と重たいため息をつく主人公二人。語り手的にもそろそろ説明つかれてきましたが、まだ続きますよ！ なんてつたつて！ 今回は『チキチキ ネット切れまでキャラを作ってしまうよ大作戦！』的な番外編ですからね！ その辺は了承していただきたいものです。主人公の影が薄いとが行つたら駄目です。

「あ、で、こつちの和服の子は澄田^{みせり}水鳥ちゃん。驚くんの妹だよ」

「(>0<::)」

無言のままベこべことお辞儀をする少女「水鳥ちゃん」。

「この子、生まれつき声がないみたいだね。それをどっにかしようとして、驚くんがチームにつれてきたんだ。だから、驚くんには言葉無しで使える《黙秘剣》を専攻してもらったりしてるんだけど、まあ、目下対策を研究中なんだ」

水鳥の頭をなでながら、恥ずかしそうに眼を伏せる驚。実は良いお兄ちゃんしていたようです。通りでチームに居るのに常識人な分けです。

「というわけで、よろしくしてあげてね」

「(・・・)」

「いいな、妹」

「羨ましいな」

無言ながらも必死に言いたいことを伝えようとする水鳥ちゃんに、なんだか和む主人公二人。ほわーん。

「そうか、つまりタームのメンバーは、シスコンとブラコンと鬼畜とブラコンとロリコンとナルシーと空耳アワーと幼女×2と馬鹿ってことか」

「シ……………ッ!?」

琴樹の言葉に、いつも感情を押し殺している鶯が愕然として声を漏らす。良いお兄ちゃんもシスコンっていうと突然駄目な人みたいに聞こえますよね。

「ちょっと、琴樹さん！ それはあんまりですよ！」

「五月蠅いよ、ブラコン」

「ブラコンって僕のことだったんですかあッ!？」

「お前…、お前をブラコンと呼ぶっていったい誰をブラコンと言えはいいんだよ」

「そこまで!? ていうか、そんな可愛そうなモノを見る眼で見ないでええええ！」

『ん、ということはもう一人のブラコンは?』

「音斬」

ですよねー

「…おい、雷人、ぶらこんって難だと思っ?」「さ、さあ、わからないな…」

『ブラボー！ コングラッチュレイション！』の略かな」「それだ！」

「といつことは、褒められてるのかな?」「褒めてるんじゃないか?！」

「やったー！ 俺たちブラコンだってー!」

「おい、音斬お前らそれ駄目だっけ落ちて。止まれ。黙れ」

手を取り合っけ喜ぶ音斬に葬屋の言葉は届かない。どうしようもないですね。

さて、これでタームメンバーの紹介は終わりですねー

ちゅーん

と、突然爆発音。…いや、爆発落ちとかじゃないですよ。

「おや、帰ってきたみたいだね」

「げっ、まだ居るのかよ…」

「もう把握しきれないって…」

葬屋と颯火の言うとおり、初見の人ついてこれてないのは確かですよ。まあ、その爆走感が言弾シリーズですからとキレイにまとめておきましょう。ね。ね!?

と、黒煙をつれて会議室に現れたのは、迷彩のつなぎに大ぶりのゴーグル、ぼさぼさ赤髪の少年と、メリタリーコートとタレ耳防止を目深にかぶった長身の少年。

「ただいま帰りました、ゼベツトさん。ちゃんと任務はこなして来ましたよー」

「ご苦労様、雪多麗斗くんせつたれいとに火柱爆くんひばしほく。ていうか、正門まで廻るの面倒だからっ

て壁を爆破して帰ってくるのそろそろ止めてくれないかな」

「爆が聞かないものでー」

「受付のヤツラが気に入くないんだよ。ったく、それにしても変に騒がしいな」

爆発と共にやってきた人に言われたくない。

爆発の所為か、とどこどころすすこげた顔をぬぐいながら怪訝そうに部屋を見わた

すゴーグル少年爆と、葬屋と颯火と目が合い、眉間のしわを一層増やした。

「誰だ、お前ら?」

「言っけなかつたっけ、悼颯火くんと弔祇葬屋くん、それから頼」

「悼に弔祇…?! ああ、あの、校舎ぶっ壊したっていう馬鹿トモか」

「おい、確かにそっただけど一応初対面なのにその言い方はねえだろうよ手前」

「俺はお前らにすこく怒っていた」

「はあ!？」

「あらあらはじまった」

つかつかと、颯火達の前まで進み出て、爆は颯火の胸倉を掴み、鬼の形相で叫んだ。

「お前らは！ 校舎を壊したんだぞッ！？ 学生にとって学校は二つ目の家みたいなもんなんだぞ！？ それをお前達は、手前の都合で壊したっていうじゃねえかッ！ 他の生徒達の気持ちも考えてみるッ！ 目の前で校舎がバキッラトカバコーンなんだぞ！？ お前達は手前のやったことを深く反省したのか！？ してないのか！？」

「あ、な、なんなんだよッ、こいつ！？」

眉間に青筋をうかべ、鋭い目で颯火を睨みつけながら叫ぶ爆。マジで怖いです。

「そんな爆に、相方の麗斗は口だけで笑いながら言う。

「ごめんね、爆怒りっぽくて正義感強いから。そういうことにすぐキレルんだよ」

「面倒くさい奴だな」

「君達駆除科なんだってねー？ 僕達も一緒だからよろしくねー」

「ああ、こちらこそ」

よろしく、と握手を交わす葬屋と麗斗。その間も、颯火は爆にドツかれ中。

「おい、そこおお！ 和やかに話してんじゃねえッ、ゲホッガホッ！」

「反省したのかッ！？」

「しっ、したっつーの！」

「嘘だな。お前ら、校舎破壊の前は寮も何度が半壊させてるらしいなッ！ 結局同じ事を繰り返してるじゃネエか！ つまり反省してないってことだッ！！」

「ッハ、だからっ、なんだっていつ、んだよっ！」

「そのままじゃお前等がこのタームを壊すのも時間の問題だっつことだ！」

「別にこんなとこ壊れたって…ウツ止める締まってる苦しいッ！」

「こんなとこって何だッ！？ ここは俺達の家だろうがアッ！ それを壊すような奴は俺が許さない！ だから反省するまでお前を離さないッ！」

「ハア？ 調子にのんじゃねえよこのボサボサ頭が！」

「俺は爆だ！ 人のことはちゃんと名前呼べッ！」

「あああああうっぜえお前ッ！ 《武零戦万》！」

ダンッ！

ついにキレた颯火は腰からリボルバーを取り出し、爆ぜるのわき腹に向けて引き金を引いた。実弾は入っていないが、言葉の力で爆はそのまま吹き飛ばされた。

「おい、颯火！ やりすぎだっつて」

「やりすぎなのはあつちだっつての！ ぐちぐち五月蠅えし！ アー、喉痛え！」

「わー、布団がふつとんだー」

スッ、と麗斗の一言で辺りが静かになった。え、今このタイミングで親父ギャグなんですか？ 颯火達の抗議の視線にも気付かず、麗斗はけらけら笑っている。

やはり、タームの一員、只者じゃない。

「つてえなアッ！ 何すんだ、悼ッ！」

「それはこつちの台詞だ、説教野郎がアッ！ 会つて突然長々と説教しやがって！ ここに来てるってことは手前だっつどつせ何かやらかしてんだろ！？ それなのに五月蠅えつたらないぜ！ つぜえんだよ！」

「つっんだとオオオッ！？ お前、喧嘩売ってんだな！？」

「あー、そうとも出血大サーピスだっつての！ 買えるもんなら、買ってみなッ！」

「颯火！ 落ち付けて！」

今にも喧嘩というか、戦争でも始まりそうな雰囲気、葬屋は慌てて颯火に言う。

「葬屋、お前だっつて聞いてただろ！？ あいつム力つくんだよ！」

「分かるけど落ち付けて！ 相手はタームなんだからどうなるもんか…」

「へえ、葬屋逃げるのか？ やっぱお前はヘッポコスナイパーだな！」

「んだとオツ！？ もう一回言っつて見やがれ！」

「あんな奴目の前にしてのうのうと逃げようとする葬屋くんは、へっぴり腰のくの坊だっつて言っつてんだよ！」

「ハア!? お前にそんなこと言われる筋合いネエよ、無計画ガンナー!」

「じゃ、一緒に戦うってか?」

「つたりめえだろオがッ! お前一人で何ができるってんだよ!」

「そつこなくつちゃ! それでこそ葬屋だ!」

完全に颯火の口車に乗せられて、冷静さをボイ捨てしてしまった葬屋くん。もはや、

会議室全体にガソリンがまかれたようなものです。マジで火事の五秒前。

「……お前等がそつ来るんならこつちだつて容赦はしねえぞ。鬨斗!」

「はいはい、仕方ないね」

「精々俺達に喧嘩を売つたことを後悔して、反省しろッ!」

「ハッ、こつちの台詞だ!」

言つて、後方へ飛んで距離を置く二組。何だ何だと騒いでいた面子も、巻き込まれないように壁際に退散する。

「おいおい、コレって大丈夫なのか!?!」あのはつちゃんだよ!?!」

「この部屋ぶつとんじゃうんじゃなかな!」「火気厳禁だな!」

「ヤベエ!」「パネエ!」

『ハッ、早々に面白いものが見れそつだなア!』

「どつなるんでしょつね…?」

「ハ、僕のことあんまりらなくてよかった。関わりたくないよあいつ」

「まったく、これだから馬鹿どもは。すぐに頭に血が上つて困るな!」

『』つげあがつて喋るな』?」

「大体あつてるが、違うわ!」

「ぜ、ぜべつとさーん。だいしょつぶなのかなあ」(。・。・。)

「はいはい、二人とも危ないからこつちにおいで」

外野が盛り上がる中、西部のガンナーのようにじつとにらみ合う二組。

「《枯死嘆々》!」「爆発しろッ!」

と、颯火が銃を構えるのと、爆が取り出した手榴弾のピンを抜くのは同時だった。

ドオオオン!

投げられた手榴弾は葬屋によって空中で打ち落とされ爆発した。爆音と共に部屋に

黒煙が広がり、その煙を抜けて、弾丸のような速さで爆が突っ込んできた。

「タタタタタタタッ!」

叫びながら向かってきた爆に、葬屋はアサルトライフルを向けて

「《降る億の星は、鳥を射る》!」

バラバラララララララッ!

引き金を引きつばなしで、爆を狙う。放たれた言弾はごとごとく爆に当たるが、それをモノともせず走り、爆は葬屋に掴みかかった。

「!?!」

「ガッ! ヒュン! ドケカシャーント!」

爆の叫んだ擬音どおりに、葬屋のを頭を掴み、振りかぶり、壁に投げつけた。その勢いは確実にこの少年の腕力を超えていた。

「手前ッ!」

颯火は即座に爆の背後へ踏み込み、蹴り倒した。そのまま、二丁拳銃を爆に向けた。

ダダダダダッ!

頭に血が上っている分、颯火も肩、脚、腹に容赦なく弾丸を叩き込む。しかし、爆

は背に乗っている颯火の脚を掴み、一言。

「バズギヤーン! と爆発しろオオツ!」

直後、爆が掴んだ足を中心に小爆発が起こり、颯火はよろめいた。その間に爆は耐性を建て直し、颯火へと拳を振り上げる。が、

「俺のこと忘れてんじゃねえッ！」

その後頭部を、復活した葬屋がライフルが直撃した。流石の爆もぐらりとよろめき、床に手をついた。そこへ焔火がたたみかけようと銃口を向けると、

「みんな、僕のことわすれてないかなー」

間延びした声が聞こえて振り返ると麗斗のチェシヤ猫のような笑みがあった。

「《チョコツと頂戴チョコレート》なんてねーッ」

「寒っ！…っつて、あれ、本当に寒い…!？」

ハッ、と焔火が吐いた息が白くなった。見ると、足元が凍り付いて、身動きが取れず、銃を握る手もいつの間にか真ッ青になって上手く動かない。

「何だこれエ!？」

「ははは! 《雪多麗斗はみんなを冷凍!》 なんちゃってー」

言いながら、手にした棍棒で床を突くと、氷柱が突如として現れ、焔火を突き飛ばした。その隙に、爆は体勢を整え、麗斗の隣へと後退した。

「はは、ビックリしたー? 僕は《笑えない言葉》で人を凍らせる《電指揮》遣いなんだよねー。ちなみに、爆は擬音での身体強化・爆発が得意な《爆弾発現》を使ってるんだよー。面白いでしょー」

「ンダヨそれ! ターム育ちは本当に変な奴ばっかだな! 大丈夫か、焔火!」

「葬屋寒い、マジ寒い冷たい! 俺を暖めて!」

「キモいよ、お前」

しかし、オヤジギャグもとい電指揮に、爆弾発現と敵としてなかなかにかやつかいでず。爆弾発現の爆だけでも大変だというのに、麗斗まで相手にしていたら…

やばい、負けるな。

頭というか体ごと冷やされた焔火と、冷静になってきた葬屋は思った。

「言いわすれてたけど、爆くと麗斗くんは駆除科じゃ一番強いからー」

と、今更重要な情報を教えてくれるゼベツトさん。

ああ、負けるわ…

「だから後悔するっていったらどうがッ! 謝るんなら許してやるけどどうする?」

「誰が手前なんかに頭さげるかってんだッ!」

「お前エエエッ! 何を言っても無駄みたいだな!」

「手前の方こそ、何言ったって聞かねえじゃネエかよ!」

「ンだとおおおおオオオッ!？」

「相手を怒らせてどうするんだよ焔火アーツ!」

「あ、つい…」

「ついじゃねえよ馬鹿アーツ!」

再び向かってくる、葬屋と焔火は苦笑いで顔を見合わせてうなずいた。

「《コンビネーション作文》!」

叫んで、二人は同時に銃を構えた。葬屋達一人一人の能力は中の上くらいなのですが、二人合わせて言葉操ることとその数倍もの力を発揮できるのです。本編ではしりとりでしたが、番外ということで今回は…

「《し》つこいんだよ偽善者がッ!」

「《ね》ことは寝て言えッ!」

「《ば》かばかしいんだよ!」

「《い》いかげんにしろよなッ!」

「《い》つまでもこんなことやってられっか!」

「《の》ろわれてしまえ!」

「《に》んたい力持たねえんだよ!」

「《し》《ね》《ば》《い》《い》《の》《に》《ッ》!」

バラバラバラバラバラバラバラバラバラ!

引き金を引いたまま叫ぶ二人。さつきと同じように言弾を受けながらも突っ込んできた爆だったが、余りの力にはじき返されてしまった。

言弾の力は言葉の力と関係している。言葉はつながりが深いほど、心がこもっているほど強い。二人はばらばらな言葉の集まり 文をつなげて、大きな力を持たせるコンピネーション技が得意なのです。この特技で様々な言葉を相手にして渡り合ってきたようなものです。

これを即興でできるあたりが、仲がいい証ですよ。本人らは認めませんけど。

「みたか！」

「その程度で、調子に乗るんじゃないわエエオオオオッ！」

額に青筋を増やし、叫びながら爆は飛び上がった。そして、腰にぶら下がった手榴弾のピンをまとめて引き抜き、二人に投げつけ叫んだ。

「バリバリトキガシャキツキツバキムシムシトキガシムカッーッ！」

爆 渾身の擬音とともに爆発した手榴弾は、通常の十倍の破壊力で葬屋達を襲った。

なす術もなく吹き飛ばされ、爆発して飛び散った破片から身を守るので精一杯だ。

「ひゅー、爆かっこいいー」

「ほ、褒めんなよ！ 照れるッ！」

正義感が強いだけでなく、割と馬鹿正直なのか、いいながら爆は恥ずかしそうに頭をかいた。割と素直でいいこかもしれないね、キレルけど。

「くっそ、こんなのチートだろっつよ！」

「とりあえず、あいつを疲労させればこっちのもんだ！ もう一回行くぞ、颯火！」

「おう、葬屋！」

二人は立ち上がりまた銃を構え、声を張り上げた。

「《し》《ら》《ゆ》《き》《ひ》《め》！」

「《し》 ろい肌の美しい姫を！」

「《ら》 いばる視した女王は！」

「《ゆ》 う毒林檎を食へさせ見事毒殺したが！」

「《き》 すというチート魔法で目覚めた白雪姫は！」

「《ひ》 るドラ展開を経て、どうにか女王をぶっ殺しました！」

「《め》 でたしめでたし！」

言う間にも銃弾は雨のように爆へ降り注ぐ。それを爆は爆風で軌道をそらしてどっにか避けているが、半分以上身体に受けてしまっている。それでも立っていられるのが、この爆少年の異様な頑丈さなのですが。

「ああ、くそ、キリがねえな！ あいつとんだけ頑丈なんだよ！」

「人間じゃないんじゃないのか？！」

「《イカはいかがですかー？ いかん、今は胃潰瘍なんだ！》 なんちゃってねー！」

と、爆にはかり注意を向けている二人に、麗斗の氷柱が襲った。

「つわあああッ？！」

避けきれず、突き飛ばされたところへ、飛び上がった影が二つ。

「もう我慢できない！」「俺たちも！」

「まーぜーてッ！」

吹き飛んだ葬屋と颯火を抱きとめて、言ったのはもちろん音斬兄弟。二人を立てせると、ギターを構えて臨戦態勢。

「え、音斬！？」

「もう、観てるだけとかつまらないよ！」「やっぱり戦闘は歌わなきゃ！」

「踊る阿呆に、観る阿呆！」「同じ阿呆なら踊らなきゃ損々！」

「と、というわけで、手伝ってやるよー！」

「ま、マジか!？」

正直このまま消耗戦になると、颯火達の負けは目に見えていたので音斬の参戦ほど嬉しいものではありません。いつもは無駄にハイテンションなKY双子だが、戦闘においては味方にいれば心強いのです!

「その代わり!」「これ終わったら俺たちと一緒にバンドな!」

「一回でいいから!」「いって言わないと手伝わないぜ!」

「バンドやらせてください!」

「組ませてください音斬さん!」

さすがのように言う颯火達。いや、ただの喧嘩にここまで自分を捨てなくても。

「音斬! 他人の喧嘩に口出すんじゃないよッ!」

「火事と喧嘩はチームの華だぜ!」「混ざらな損タ!」

「ッたくお前は!」

荒い息をしながら呆れた調子で言う爆。そんな様子にも気を止めず、双子はビックを高々とかかげた。

「じゃあ、いくぜ! 雷人!」「おつ、任せろ! 風刃!」

「遠くば声を音に聞け!」「近くばよって目に物みよ!」

「天下双児の歌武器者! 音斬兄弟ただいま参戦!」

ぎゅいーん!

と、奏でしたのは童謡「焚き火」のロックアレンジ。

「家族を 殺した 殺人鬼

死刑だ 死刑だ 絞首刑

吊るすそうか 吊るすそうよ

口笛ヒューヒュー吹いている」

寸分の狂いも無い双子の歌声に、動いたのは電気コード。ぬらりと蛇のように立ち

上がったと思つと、一直線に爆の首元へと伸びて、巻きついた。

「カッ……ハッ……! てめッ……!」

「はい、これで擬音は使えないね!」「颯火! 葬屋!」

「さくつと一気に殺っちゃって!」

「…お前ら時々怖いよな」

ニコニコ笑つ音斬に邪気の欠片も感じられない。

改めて言いますが、コレは口論から発展したただの喧嘩です。

「よし、行くぞ、颯火!」

「おつ、決めてやる!」

「うッ……く、そお、おッ!」

コードをはずそうともかく爆に、颯火と葬屋は銃を構えて、と言っても銃口を向けるのではなく、鈍器として使うために振り上げて、駆け出した。

「銃撃よりこつちの方が効くんだよな、お前!」

「これで終わりだああ! 覚悟しやがれッ!」

ヒッ、と爆が擦れた悲鳴を上げた、

その時、

「死ぬよッ!」

冷たい一言が放たれ、部屋中の温度が一気に下がった。葬屋達の動きも凍りつく。

全て、言葉どおりの意味で。

「そんなことやって、大丈夫だと思ってるの? 打ち所が悪かったら爆、死ぬよ?」

淡々と語るのは麗斗。口元はつつすら笑みを浮かべているが、厚い前髪の下目はまるで笑っておらず、冷たい闇を浮かべている。

「《これ、ただの他愛も無い喧嘩でしょ？ 大怪我させてどうするの？ これから一緒にやっついていくんだよ？ 怪我した方も、させた方も、今後辛いよね？》」

「うっ……」
「笑えない。」

言葉につまった二人の手足は完全に凍りつき、まったく身動きが取れない。

これが本当の意味での《笑えない言葉》。さっきまでの麗斗はお遊びみたいなもので、これが本当の《電指撞》の力なのだ。

「《爆は僕の大切な相棒なんだから、死んじやったりしたら困るよ。僕どうすればいいのかわからないよ。僕ね、笑えないのがコンプレックスだったんだ。でもね、色々あって、爆に励まされて、どうにか形として笑えるようになったんだよね。爆いなくなったらどうなるかな。また笑えなくなるかな。そしたら嫌だな》」

「お、おい。」

「《ねえ、爆死んだらどうするつもりだったの？》」

と、麗斗が口元だけでニコリと笑った。その時、爆ぜるに巻きついていていたコードが氷となって崩れた。解放された爆は深呼吸すると、憤怒の表情になり、

「死ぬかとおもったじゃねえかあああああああああ！」

叫んで、手榴弾を幾つも取り出しピンを抜いて、凍り付いて動けない葬屋と颯火に向かって投げた。

「爆発しろおおおおおおおおおっ！」

「うっわあああああああああッ……」

ちゅーん

大爆発が起こって、部屋の中は黒煙に包まれた。

煙のなかでパララドカンチユドンダダダガギズギヤドカンと喧嘩が未だに続いてる。

「馬鹿じゃないの？」

事態を傍観していた琴樹は呟いた。

「『なあなあ、毒舌少年、お前故郷に帰りたいと思わないか？』」

と（蒼慈に憑依した）霜一が声を潜めて言った。

「そりゃあ、帰りたいけど、なんで？」

「『こは一つ手を組んで、ココを抜け出さないか？』」

「はー？ そんなこと出来んの？」

「『出来る出来る。いつもそれで抜け出してんだけど、今回はあの双子と馬鹿につかまっちゃまってここに返されてきたんだよ』」

「ぶーん、それなら……」

「『契約成立だなー』」

ニツ、と霜一は口の端を歪めて禍々しく笑った。

「ダズンズ！」

と、葬屋達がドンパチやる煙の向こうから何事か聞こえてきた。

「『ハイユー、お前は余りにも馬鹿だからゴミ箱を冷蔵庫と間違えたそっじゃないか！』」

「『ハイユー、お前は頭が悪すぎて、ガラスに正面から激突したそっじゃないか！』」

言い合っているのは傍観していた琴樹と霜一だった。

ちなみに、ダズンズというのは、本来は相手の母親のことを罵倒しあい、どちらが先に相手を怒らせることが出来るか競う言葉遊びの一種だったりします。

「何やってんだ、あいつら？」

「そろそろ、飽きてきたから暇つぶしに入ったんじゃ…つわつやめる爆つわああ」
「余所見してんじゃねええッ！（怒）」
「ちゅどーん！」

こんなに手榴弾爆発させているのにこの部屋良く持ちますね。
という間にも琴樹と霜一はダズンズに興じている。

「ハイユー、お前は馬鹿だから、ポテチを喉に詰まらせて死んだんだってな！」

「『ハイユー、お前は馬鹿だから、好きな女の子に思いつきりつられたんだってな！』」

「へ、ハイユー、お前はキモイのに、まだ生きてるんだな！」

「ん、というか、待てよ。琴樹は罵倒で悪言を作るだろ、霜一は罵倒で力つくだろ。

これってヤバくね？」

と、葬屋が気付いた時にはすでに遅かった。

「《エドツニココー》《ヨコアガワハノトコノフ！》」

琴樹が高らかに言うつと、周りに漂っていた黒い気が琴樹の頭上に集まって化物の姿に変化した。それも、並大抵の悪言とは比べ物にならないような大型のものでした。

あ、ヤバイ。

「琴樹さんすごいですね！『やるなあ毒舌少年！』」

「褒めるくらいならさっさと行きますよー！」

『』よっしゃー！！じゃあとりあえず、その壁がちめけー！』

「おい、お前ら何しようとしてんだよッ！俺が何でこいつらと喧嘩してると思っ
てんだよッ！施設を壊すんじゃないやねええええええええええええ！」

『』あ、しまったバレた』

「使えないなDSだな」

『』大丈夫、俺今超パワーアップしてるから爆くらいちよちよいのちよいだぜ』

「誰だろつと、僕とリンを阻む奴は死ぬばい！」

「おい手前ら止めるってコイツマジで強いから！」

「というかそろそろこの部屋限界だつて！ポロポロだつて！」

「楽しくなってきたあああ！『イヤッハアアアアアアアアア！』」

「あ、いつのまにかゼベットさんが女の子達つれていなくなっちゃった」

「おい、私は残っているぞ麗斗」

「お前、女にカウントされていないんだよ」

「な、なんだとッ！？無礼な！私はれつきとした乙女だ！」

「いや、無い胸を張られても…」

「おい、貴様それはセクハラだぞ」

「そつだ！柏は女だぞッ！麗斗謝れ！」

「あ、ごめんねー」

「それにな、女じゃなかったら好きになる奴もいないだろつがッ！」

「え、なにそれどういうこと？詳しく」

「あ？お前ら知らないのか？柏のこと好きなやつがいるんだよ」

「つつそだあ！？誰だよッ！？」

「え、そりゃあ、う」

「黙れッ！！」

ズガン！と、鷲が刀を床につきたて叫んだ。…叫んでから、ハツとして、口を閉じ、
うめきながら顔を真っ赤にして蹲った。

「あーあーなるほどなあー」

にやにや笑いながらつなずく焔火と葬屋 あああ、と頭を掻き毛りながら鷲は

「も、黙秘剣……………行使する……………」

と、も「も」が精一杯であった。

一方で当の皇月は『こいつ突然どうしたんだ？』というように小首をかしげている。

「この作品の女子ってどうしてこつも鈍いんでしょうかね？」

「驚、あとでちよつと俺たちと話そうぜ」

「……も、黙秘する……」

「いやあ大丈夫だって、俺たちも応援するから」

「恋路は辛いけど、その先にきつと幸せがあるよ。うん、僕もリンと幸せになる」

「お前のことは聞いてねえよ」

「驚、お前のこと今まで得体の知れない奴だと思ってたけど認識改めるよ」

「お前そんなこと思ってたのか！？ 驚このメンバーの中で一番の良い奴だぜ！？」

「爆は一タキれるなよ」

「だけどッ！ うー……」

「ていうか、俺こそさっきは逆ギレしてわろかったな」

「……いや、俺も初対面なのに突っ込みすぎだった。気をつける……」

「いいって！ おあいこつてことで水に流そうぜ！」

「いや、校舎のことは水に流すなよ」

「まだ言うのか！？ なあまだ言うのかよ！？ 今、まとまりかけてたじゃん！」

「いや、お前まだ校舎のことについて反省したとは一言も言っていないじゃないかッ！」

「だから、あの時反省しましたって言っただろッ！」

「誠意が足りねえんだよッ！ もっとしつかり反省しろッ！」

「本当お前うげえええなあああッ……」

「もつ勝手にしてろよお前ら」

「ごめんね、爆「こいつ子だから」

「いや、麗斗。お前も十分怖かったから」

「ちよつと、爆！ もつ終わったでしょ！？」「そろそろ二人を貸してよ！」

「バンドやるっていったんだから！」「次は俺たちの番だつてば！」

「おおおなんだかワクワクしてきたな！」「ドラムとか入るんだぜ！？」

「ヤベエ！」「バネエ！」

「お前ら五月蠅え！」

「いや、まさか約束をやぶるだなんていうなよ！」「死刑だぞ！？」

「大丈夫やるから、大丈夫だからギター構えななつて」

「ところでなんで驚は落ち込んでるんだ？ うーん、気難しい奴だなー」

「え、『小難しい奴だな』？ 確かに驚は小難しいところも……」

「違つわッ！」

「ん……？ 驚からもものすごい殺意を感じるんだが、気のせいか麗斗」

「月の無い夜は気をつけたほうがいいよー」

『よし今だ逃げるぞ琴樹！』

「気安く呼ぶなよ下S野郎！」

『そういえば、結構仲良くなつたのにお前俺達の事名前で呼んでくれないよな』

「リン以外名前で呼ぶ必要はないでしょ」

『そういつとこ人として終わつてるよな』

「だから、俺がサイドで、雷人がベースで、『颯火はドラムで、葬屋はボーカル』

「ていうか、お前ら俺たちのことだけニックネームでよばないな」

「そうちゃんだとかぶるから呼んでないんだけど」「何呼んでほしい？」

「そうだなあー」「かぶらないようにするとー」

「とーちゃんとかーちゃんだ！」

「夫婦かッ！」

「とーちゃんー！」「群れるなつぞい！」

「《と、夢を見た》」

声がすると一瞬の暗転の後、ボロボロになっていた部屋が綺麗に片付いていた。

説明しよう！ これぞ最強の言弾、『夢オチ』。ソレまでにあったアレコレも全て無かったことになってしまつたのだ！ ある意味タブーといわれている禁断の言弾である。

「もう話はあつたかな？」

呆然とする少年少女に、にっこり笑つた声の主はゼベットさん。

ゼベットさん初の言弾、まさかの夢オチ。

まあそうでもない！この話オチがつかないのですが。

まあみんな落ち着きませんもんね、なんちゃってー

「さて、そろそろ夕飯だよ。うさぎちゃんやみどりちゃんが待つてるよ」

はい、となんとなくみんな返事をして、食堂へ向かつていく。

この後、食べ物を粗末にするなど爆がキレたり、鷲が例の話を振られてお茶を噴出したり、鋭利の感想が意味分からなかったり、そんな愉快な夕飯が繰り広げられたりするのだが、それは皆様の想像にお任せします。

そんなこんなで、馬鹿一人はなんだかんだでチーム生活に馴染んでいくのであった。

めでたしめでたし？！

言葉遊び系ハイテンションガンアクション、言弾シリーズ！

次があるかはお楽しみ

【オマケ小話】

囃「あの、なんていうんだろうな、こつ、体の毛がゾワゾワってなってる…」

囃「まさにあれは身のももよだつて感じだったネー」

囃「そう、それだ！」

↓囃は詠集がないので擬音ばかり使います

隼「なあ、鷲。今日なんで元気なかつたんだ？ 私何かしたか？」

鷲「……………」

隼「す？」

鷲「……………」

隼「じ？ じー、じー、時間！ アーッ！ 「ん」付いてたあーッ！」

↓進展とかそういうの無

↓バレンタインです。(季節外れとかいわない)

琴「ハッハー！ 食け組男子残念だったな！ 僕はリンからのがあるもんネー！」

囃「おい、獺野、それ『チームの皆さんへ』って書いてあるぞ」

琴「僕のだもんネー！」

囃「おい、聞けって」

↓琴樹一人勝ち

囃「いるかはいるかー」

囃「……………」あつはつはつははッ！ いや、囃牛いつもおもしろいな！ うける！」

茸・颯「……………」

《NEXT…?》

↓囃の笑いのツボは謎(だから凍らな)。あと笑つときは囃茶。(囃)。